「湘南」イメージにみる空間認知について

林　田　泰　文

I　はじめに

近年、地理学では、人間がある空間に関して抱くイメージを解き明かそうとする多くの研究が、さまざまな問題意識とともに注目されるようになってきた。なかでも、メンタルマップ研究は、知覚された環境と実際の環境との間には何かの意味ある差違が存在する、という点に着目したものであり、環境に対する地理的イメージの認知表象としてのメンタルマップを中心に据え、そのフィルターを通して、人間の空間的行動の説明、理解を意図する行動論的観点に立つ一連の研究である[1]。

メンタルマップ研究はグールド Gould[2] のアメリカ合衆国における、大学生の居住地選好を分析した研究によって、広く知られるようになった、と言っても良いだろう。それは彼の研究が、人間の頭の中に描かれている精神的地図を、客観的方法を通して、具体的に明らかにする道を切り開いた点と、それが地理学におけるメンタルマップ研究の最初の実証的研究であったという二点において画期的研究であったためである。グールドの研究の結果は以下のように要約できる。ある地域の人間集団には、たとえ個人ごとには差異があったとしても、中にはかなり共通した空間的パターンを持ついくつかのメンタルマップが存在する。それらのメンタルマップは地域の自然環境、地域構造、社会構造を反映した空間的パターンをもっている。ある地域に対する複数のメンタルマップは、単に個人的差異ではなく、居住地を選好するときの価値基準すなわち選好体系による差異であって、それらの個々は共通の相互主観によって裏打ちされたものである。

中村[3] はグールドの方法を日本に適用した。県を選好の単位として、6都市の高校生にアンケート調査し、居住地選好を分析したのである。その結果、二つの独立したメンタルマップの存在が明らかになった。それらは回答者の居住地を反映する地域性と観光的イメージの強い県を高く評価する選好体系と農村と都市を対立させる選好体系によるものである。そしてこの二つの選好体系の出現は選好主体の位置による違いのないことが明らかとなった。また、諸外国と比べて日本のメンタルマップは、均一性が低いことも明らかとなった。さらに結果を個別にみていくと、現在住んでいる自県の評価は概して高いが、千葉県の東京都に対する評価のような、隣接地低評価パターンなど地域的特色も存在した。

ところで、1994年10月31日から神奈川県で登録の始まった湘南ナンバーは、新設構想当初から世間の注目を集めた。これは「湘南」という名前自体がブランド化しているためであり、ナンバーを管轄する地域をめぐっても、さまざまな議論が持ち上がったほどであるが、最終的には図1のように決定した。しかし、本来「湘南」という地名は限定された地域名としては現存しない。つまりどこからどこまでが「湘南」なのか、「湘南」の条件とは如何なるものなのかは、確実なことは誰にもわからないし、どこにも記されていない。だが、神奈川県に居住する者ならば、個々の頭の中に「湘南」と聞けば思い浮かべるある特定のイメージは存在するであろうし、それぞれに考える「湘南」の範囲も存在するであろうことも明白な事実

＊　林田　泰文　　本学地理学専攻　1995年3月卒業

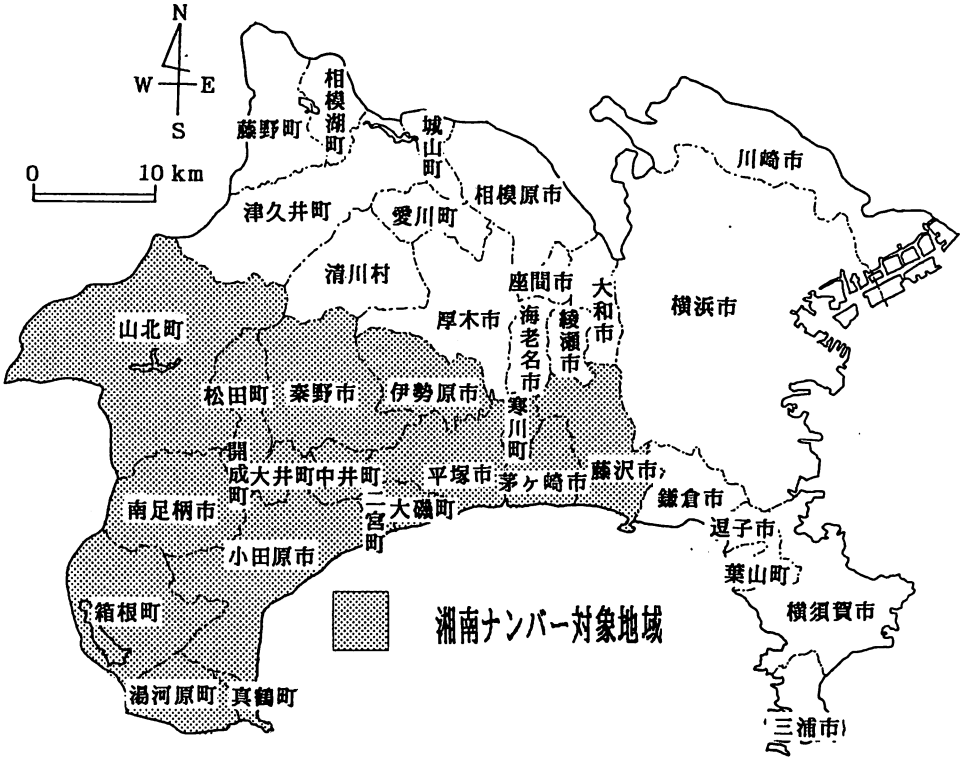


図1　湘南ナンバー対象地域　1994年10月31日現在

である。

そこで、本研究では有名でありながら、明確な地域限定のなされていないあいまいな地名である「湘南」について、神奈川県在住の高校生がイメージする「湘南」の範囲を例に、そのメンタルマップを分析することによって、「湘南」が人々の認知上では、何処の地域に存在するものなのかを明らかにする。またさらに、その地域範囲がどのような特徴を持つものなのかについても明らかにすることを目的とする。

II　研究方法

1　調査校の選定

現在、「湘南」地域の明確な定義はどこにもない、とは前述したとおりだが、ある程度の目安ならばいくつか存在することも確かである。そのうち本研究では企業や施設名称に含まれる「湘南」の個数を例として挙げ、その結果を踏まえて、アンケート調査を行なう高校を選定した。

「湘南」を含む施設名称の個数は、明確な定義のない「湘南」を利用して、各施設がイメージアップを図った結果もあり、近年非常に多くなったものである。新聞記事の地域ニュースよりその実例を挙げると、ＪＡ平塚がＪＡ湘南になると就職希望者が増加し、ＪＡ湘南から出荷する薔薇が以前より高く売れるようになった。相模工業大学が湘南工科大学になると、理科系大学不人気の中志望者は15%増加した。横須賀市に本店をもつ信用金庫が湘南信金と名を変えれば預金者が増加した、ということなどである。これらを見聞きする地域住民が個々のメンタルマップに影響を受けていることは、容易に推察でき、「湘南」イメージを計る一つの指標としては有意なものであるといえるだろう。

「湘南」を含む施設名称を50音別電話帳より

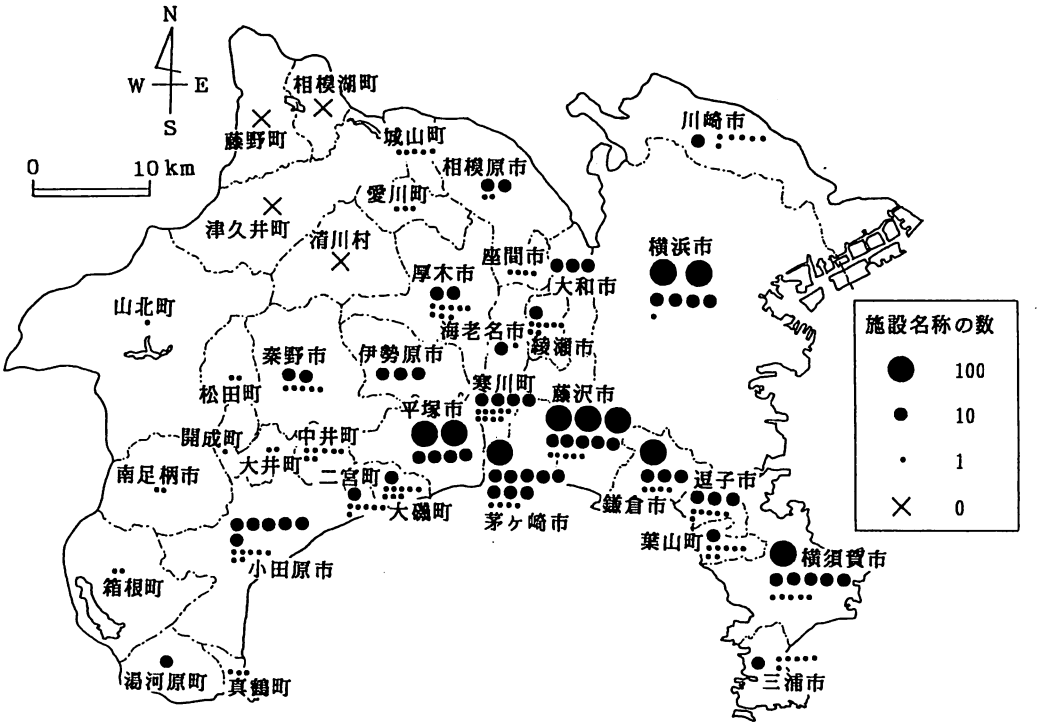


図2　「湘南」の名を含む施設名称の分布（50音別電話長による）

1994年6月1日現在、それぞれの施設名称の個数は各市町村に集計

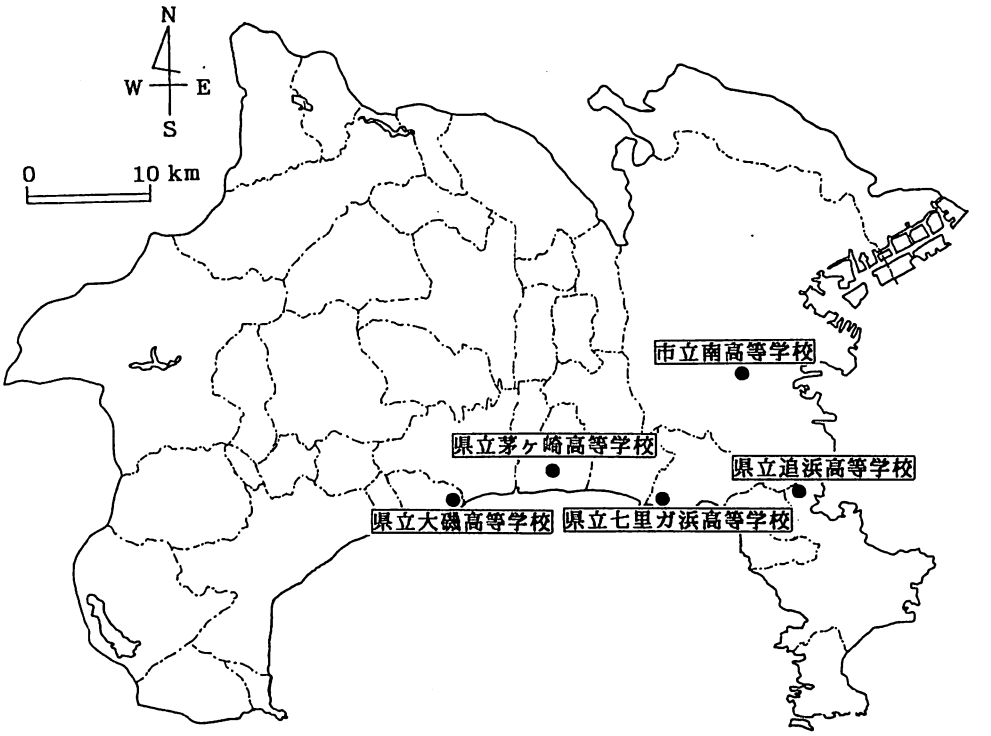


図3　研究対象地域と調査校の所在地

集計して[4]各市町村別に示したものが図2である。湘南を名称の一部としている企業その他施設が全部で1749個存在した。この図を見ると、もともと人口が多く各種施設も多い横浜市さえも押さえて355個と飛びぬけて多いのが藤沢市であることが目立つだろう。百以上の記載があった市は藤沢市以下、横浜市・平塚市・茅ヶ崎市・横須賀市・鎌倉市の順である。この図より言えることは、少なくとも名称における「湘南」は沿岸地域に多く、また、全体として神奈川県の東に偏っているということである。

この結果を踏まえて、図3で示すように5校のアンケート調査を行う高校は神奈川県内の5校の公立高校に選定した。公立高校を選んだのは、学区が規定できるので、容易に居住地による結果の差違を見ることができるためである。5校の高校はそれぞれ、南高校は横浜市南部、追浜高校は横須賀市・三浦市・逗子市・葉山町、七里ガ浜高校は藤沢市・鎌倉市、茅ヶ崎高校は茅ヶ崎市・寒川町、大磯高校は平塚市・大磯町・二宮町等の学区に所属している。よって、これらの高校を選ぶことで「湘南」を含む施設名称の個数が、50音別電話帳に百以上の記載がある市をすべて網羅できるのである。なお、学区外から通学している生徒については、データの純粋化のためにやむを得ず除外した。

2　調査方法と分析手順

アンケート調査は、選定した5校の公立高校に依頼して、白地図上へ各高校生がイメージする「湘南」の範囲を、曲線で囲むように描いてもらう自己記入式で行った。調査期間は1994年6月29日より同年7月15日までと同年9月5日から同年9月12日までである。アンケート用紙の回収枚数は514枚で、事前の説明が不十分だったためか402枚が有効枚数であった。有効枚数の内訳は、大磯高校94枚、茅ヶ崎高校56枚、七里ガ浜高校64枚、追浜高校121枚、南高校67枚であった。そもそも本研究で高校生を被験者としたのは、高校生が調査しやすく、まとまった数のデータを集めることが容易だということもあるが、高校生は経験、環境といった点において比較的均質なグループと思われるので、今回のように多数の調査地点を持つアンケート調査においては、各地の平均的な結果を得るうえで適していると考えたからである。

得られた回答結果は以下の手順によって分析した。まず白地図に描かれた回答を、各被験者が、百分率で各市町村域の何%を「湘南」の範囲として認知しているか、10%•20%•30%というように10%単位に変換し、定量的データとした。このときのデータは、1%単位をすべて切り捨てて、10%単位で表わしたものである。次に、このデータを集計して、その平均値を図示した。これは、最初に「湘南」の範囲を概略だけでも把握することによって、後の詳細な分析を行いやすくするためである。さらに、データを居住地別（高校別）にクラスター分析[5]して、その結果を解釈することによって、「湘南」の範囲における高校別の特徴を求めた。このときの分析は、データをクラスター化することで、地域を分類して、最も「湘南」として認知されやすい場所、その次に「湘南」として認知されやすい場所、あまり「湘南」の範囲として認知されない場所、というように「湘南」の範囲としての認知上における順位付けを試みて、高校別の差違を見る、といった手順で行なった。そして、最後に、高校生の思う「湘南」の範囲と居住地の関連を、数量化2類を用いて、考察した。

Ⅲ　結果と考察

1　「湘南」の範囲の概略

得られたすべてのデータを集計して、各市町村別にその平均値を示したものが図4である。この図によると、70%以上の市域が「湘南」の範囲に入る、とされたのが茅ヶ崎市であり、それに次ぐ50%以上の鎌倉市・藤沢市・大磯町と比べても、これが突出しているのが分かる。さらに、平塚市・逗子市・葉山町なども30%以上入り、ある程度は「湘南」の範囲内と認められているようである。また、三浦市・横須賀市・小田原市・寒川町・二宮町の5市町も「湘南」の範囲内、と見なされることが皆無ではないことも分かる。以上の12市町以外の市町村については、各市町村別にその平均値が5%未満の値を示し、非常に低いと見なされるので以後の分析からは除外した。

これらの結果より分かるのは、茅ヶ崎市を中心とした相模湾岸沿いの東西7市町域が「湘南」の範囲とイメージされることが多く、それ以外の地域ではほとんど例外程度の値でしか「湘南」の範囲とイメージされることはない、ということである。この結果は前述の「湘南」を含む施設名称の個数の集計結果と比べて、横浜市・横須賀市の結果においては大きく異なるが、葉山町・大磯町などもともと人口も少なく、したがって施設が少ない地域を除けば、概要としては一致している。つまり、市の人口などでは、ほぼ同格にある藤沢市や茅ヶ崎市と小田原市が、「湘南」を含む施設名称の結果と「湘南」の範囲の結果が同じ様に表れているのである。おそらく、横浜市・横須賀市の結果の違いは、葉山町・大磯町とは逆に、人口が多く産業も全国レベルまで発達している2市なので、もともと企業その他施設が多いため、施設名称の結果では高い値を示したと考えられる。

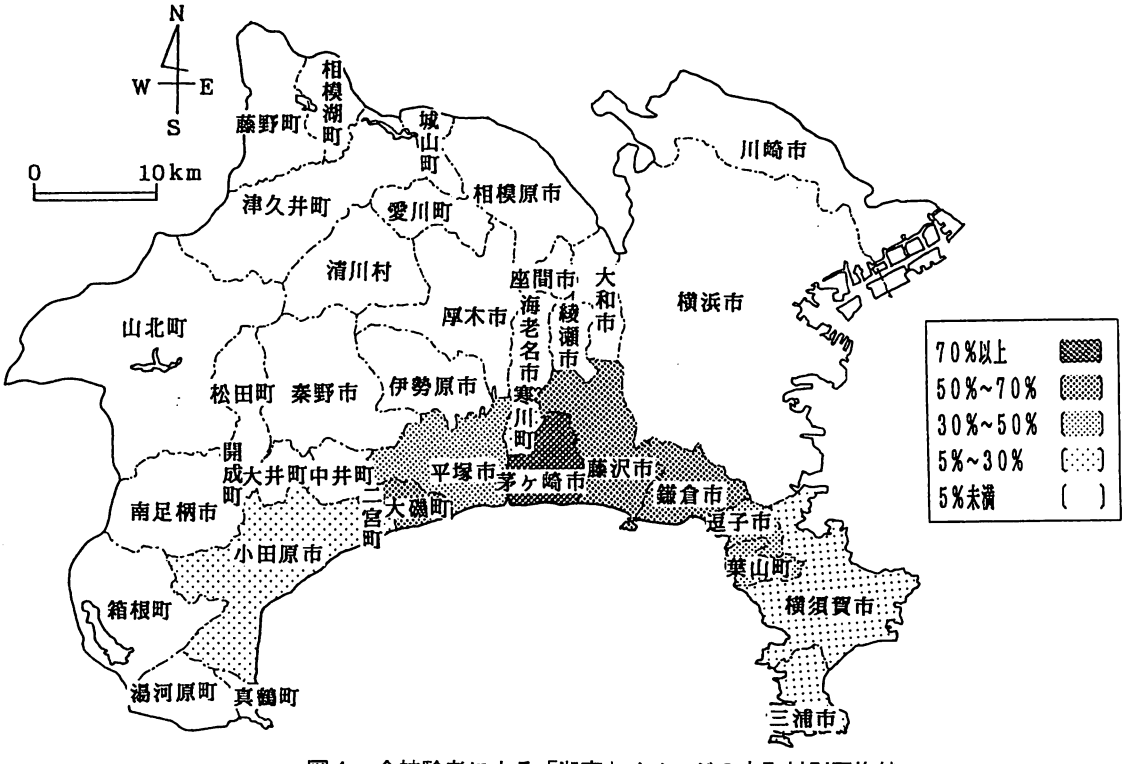


図4　全被験者による「湘南」イメージの市町村別平均値

2　「湘南」イメージからみた地域

本節では、高校別データのクラスター分析結果をもとにした、分類図によって分かる「湘南」としての評価の共通点と差違により、地域の階級区分を試みた。これは、本研究の目的である「湘南」が、人々の認知上では、どの地域に存在し、それはどのような特徴をもつものなのかを明らかにするためである。

まずはじめに解釈するのは、高校別にみたとき最も「湘南」の範囲の扱いに差違があった、七里ガ浜高校と大磯高校を取り上げた図5と図6である。この二つの図はそれぞれ、七里ガ浜高校の結果では、最初に茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市が高い類似性で結びついて「湘南」を表わすクラスターとして認知され、それに次ぐものとして逗子市・葉山町があることを示しており、また、大磯高校の結果では茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市と平塚市・大磯町を同格とみなして、これら5市町を「湘南」として認知している、と解釈される。つまり、二つの図を見比べると、七里ガ浜高校の結果では、「湘南」の範囲が大きく東に偏っているのに対して、大磯高校では、それが西に偏っているのが分かる。

次に、七里ガ浜高校と大磯高校の中間に位置する茅ヶ崎高校の結果を示したのが図7である。この図には、前述の2校の間の結果を見出すことができる。つまり、茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市については2校と同じだが平塚市・大磯町の扱いが、この3市よりやや落ちたレベルで「湘南」として認知しているのだ。

さらに、南高校・追浜高校の共通の結果を示しているのが図8である。南高校と追浜高校は、ほぼ同じ解釈が成されたため、一つの図によってそれを示している。これによると、七里ガ浜高校と大磯高校の結果を合わせたように、広い範囲で、「湘南」の範囲が描かれているのが分かる。その分類図は、大磯高校と同様に茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市・平塚市・大磯町の5市町を「湘南」として認知する一つのクラスターであるとし、さらに、それに次ぐものとして逗子市・葉山町があることを示している。

以上の分析結果を総合して、各高校の分析結果の差違に注目すると、次のようなことが考えられる。七里ガ浜高校と大磯高校の結果の違いは、それぞれの高校生がブランド名称である「湘南」を、地元周辺がより広くなるように誘致したい、との思いから、その範囲を東西方向に移動させていることの表われではないだろうか。なぜなら、この2校の中間に位置する茅ヶ崎高校の結果が、大磯高校のそれよりも「湘南」の範囲が、東へスライドし始めている状態を表わしている、と考えられるからだ。また、南高校と追浜高校の結果がこれら3校と違うのは、この2校はそれぞれ横浜市南部と横須賀市周辺を学区としており、まず地元を湘南とは考えないので、他の3校のような地元意識から離れ、「湘南」の範囲決定において一定の距離をもった判断をなしているためと考えられる。

最後に、分析結果の共通点について注目すると、茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市の3市はどの高校でも例外なく、最も「湘南」地域と認知されやすい、という結果が見出された。よって、これら3市は「湘南」としての認知の度合から、誰もが「湘南」と思っている地域であるといえるだろう。さらに、平塚市・大磯町・逗子市・葉山町の4市町は、調査校による差違があり、上記の3市に比べると「湘南」としての評価はやや低いものだと見なされるので、多くの人々が「湘南」と思っている地域であると考えられる。また、三浦市・横須賀市・小田原市・寒川町・二宮町など5市町は、どの高校でも例外なく、あまり「湘南」地域として見なされないという解釈がなされた。しかしこれは、茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市や平塚市・大磯町・逗

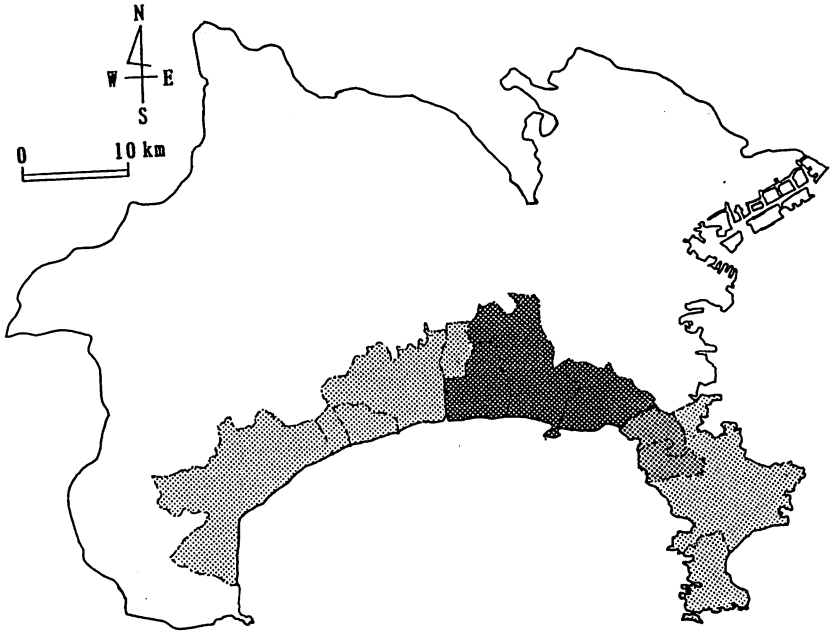
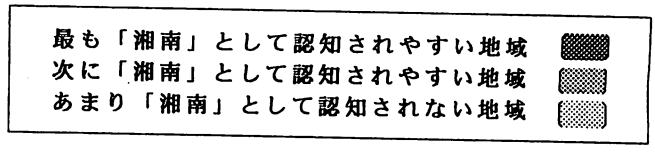


図５　「湘南」イメージに見る地域分類図（七里ヶ浜高校）



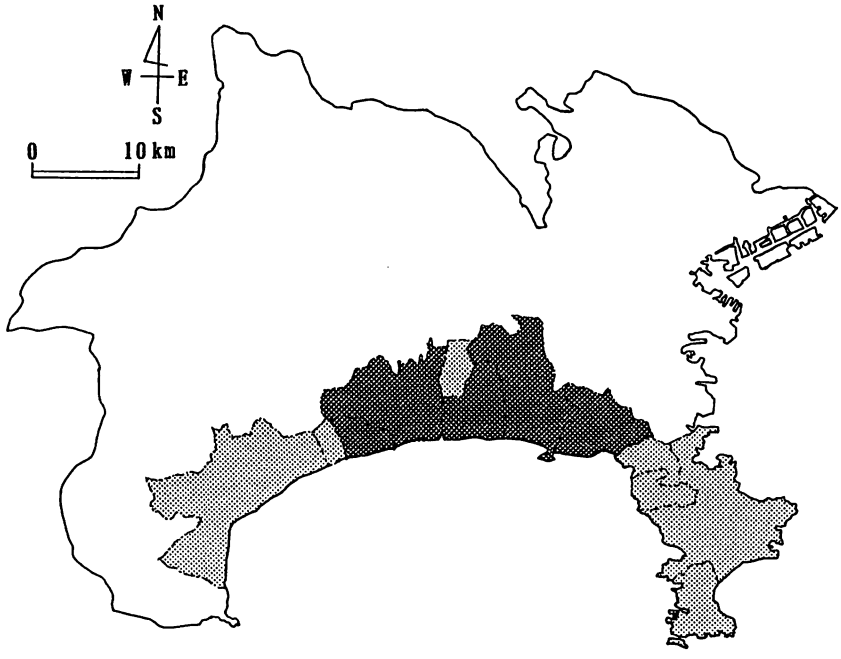


図６　「湘南」イメージに見る地域分類図（大磯高校）

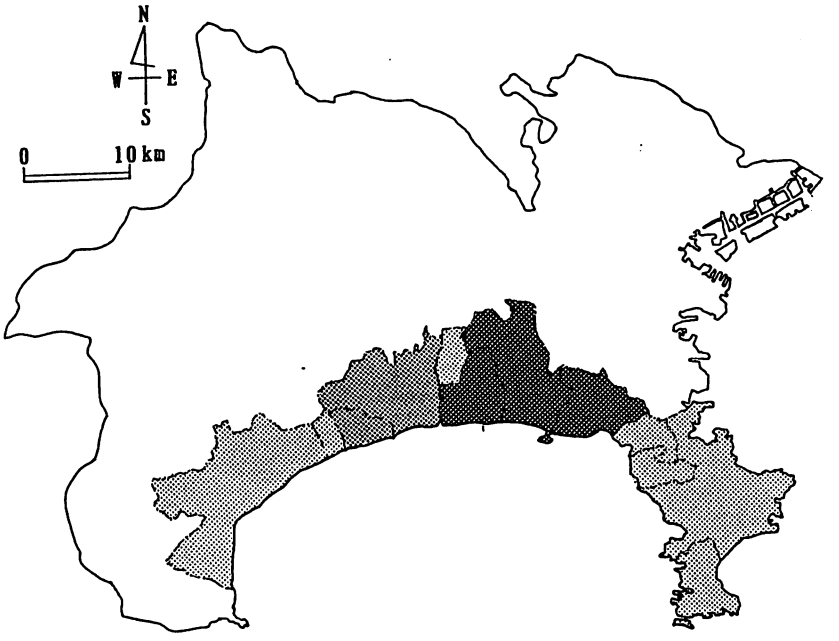


図7　「湘南」イメージに見る地域分類図（茅ヶ崎高校）

最も「湘南」として認知されやすい地域
次に「湘南」として認知されやすい地域
あまり「湘南」として認知されない地域

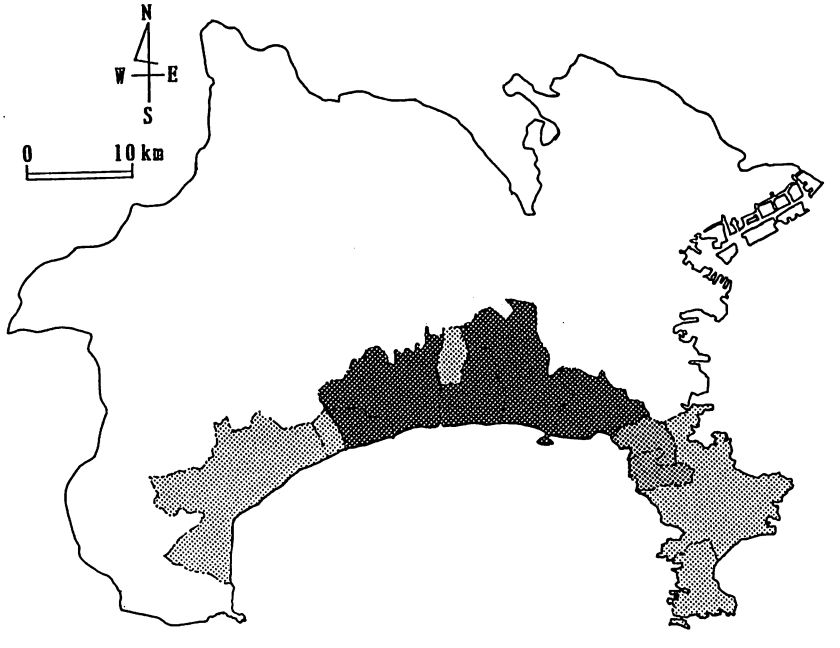


図8　「湘南」イメージに見る地域分類図（南高校・追浜高校）

子市・葉山町の7市町と比較すれば、という意味であり、分析の初めに除外した地域と比べればこの5市町も「湘南」地域とされることもあるので、「湘南」として評価の認知の度合から、一部の人が「湘南」と思っている地域であるといえよう。

3　「湘南」の範囲と居住地の関係

前節において、高校別の結果で分析を進めたのは、「湘南」の範囲の差違とその被験者の居住地には、何かの関連が存在する、という仮説を前提条件にして、進めたためである。そこで、最後に高校生の思う「湘南」の範囲と居住地の関連を、数量化2類を用いて考察した。

表1は、前節のクラスター分析の結果から得た「湘南」地域とそれ以外の地域の2分類を外的基準とし、被験者の属性をカテゴリー変数とした[6]、数量化2類の結果をまとめたものである。これによると、レンジにおいて2.957と他よりも突出して高い値を示している要因アイテムは高校名、つまり居住地である。この各カテゴリースコアを見ると七里ガ浜高校が＋1.533、大磯高校が－1.424となり、この二校で「湘南」と見なされている範囲が典型的に異なっていることが分かる。また、茅ヶ崎高校のカテゴリースコアは0.520であり、その2校の中間の値であることからも、「湘南」の範囲と居住地の間には高い関連がある、と言うことができるだろう。

しかし、それ以外のカテゴリーについては、どれもカテゴリースコアが低く、居住地のカテゴリーに比べて有意性があるとは言えない。強いて言えば、居住年数のカテゴリーである1年未満におけるカテゴリースコア－0.549に、多少の有意性を見ることができるが、これも最近まで他地域に住んでいたため、と考えると居住地の有意性を裏付けるものになるだろう。

表1　数量化2類の結果

（「湘南」の範囲と被験者の属性における判別結果）

要因ｱｲﾃﾑ	ｶﾃｺﾞﾘｰ	ｶﾃｺﾞﾘｰｽｺｱ	ﾚﾝｼﾞ
性別	男性	-0.139	0.238
	女性	0.098	
高校名（居住地）	七里ガ浜高校	1.533	2.957
	大磯高校	-1.424	
	茅ヶ崎高校	0.520	
	南高校	-0.091	
	追浜高校	0.105	
居住年数	1年未満	-0.549	0.777
	1～3年	0.094	
	4～9年	0.227	
	10年以上	-0.046	
1年間で「湘南」の海水浴場に行く回数	0回	0.338	0.570
	1～3回	-0.232	
	4～9回	0.089	
	10回以上	-0.044	
「湘南」の名称に対するイメージ	良い	-0.082	0.512
	どちらかと言えば良い	0.096	
	どちらとも言えない	0.131	
	どちらかと言えば悪い	-0.381	
	悪い	-0.380	

Ⅳ　むすび

本研究では、神奈川県に在住している高校生がイメージする「湘南」の範囲を例に、「湘南」が人々の認知上では、何処の地域に存在するものなのかを明らかにし、また、その地域範囲がどのような特徴を持つものなのかを知るために分析を行なった。その結果は以下の二点に要約できる。

(1)　「湘南」の範囲は相模湾岸沿岸地域における、東は葉山町から西は大磯町までの間であることが多い。また、その範囲の捉え方は大きく二つのパターンに分かれる。すなわち、「湘南」の範囲として茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市の3市に葉山町・逗子市を合わせるか、あるいは平塚市・大磯町を合わせるか、の二通りである。

(2)　「湘南」としてもっとも認知されやすい地域は、茅ヶ崎市・藤沢市・鎌倉市の3市である。そして、これに次ぐ地域は、平塚市・大磯町・逗子市・葉山町の4市町である。また、それら7市町に比べると、はるかに低い評価としてだが、三浦市・横須賀市・小田原市・寒川町・二宮町など5市町についても、「湘南」の範囲内とされる場合がある。

空間認知をテーマとして掲げた研究としてみると、本研究はいくつかの課題を残している。それは本研究では、調査は高校生という限定された年齢層について行なったため、世代差による結果の差違を見出すことができなかった。これはまとまった数のデータを集める上で、止むを得ないことであったが、もし世代の違いによる差違を見出せれば、研究結果はさらに奥行きのあるものになっていただろう。この課題については、いずれ機会があれば改めて検討したい。

注

1）中村豊（1979）：メンタルマップ研究の成果とその意義　人文地理,31-6,p.507～523

2）グールド・ホワイト（奥野降史・山本正三訳）(1981)：『頭の中の地図－メンタルマップ－』朝倉書店

3）中村豊（1979）：わが国のメンタルマップの空間的パターンと居住選考体系　人文地理, 31-4, p.307～320

4）この時、企業全体の名称に含まれる場合などは、その支店・営業所等について、それぞれを別々にカウントした。これは地域住民にとっては支店の名称だろうが、企業全体の名称だろうが、見聞きするという点においては大きな差違はない、と考えられたためだ。

5）クラスター分析法とは、異質なものの混ざりあっている対象を、それらの間の類似度にもとづいて、いくつかの集団に分類する方法である。また、本研究の場合、類似度の定義のしかたは、クラスター内の距離平方和が最少となるようにクラスター化するウォード法を用いた。

6）数量化理論を用いるには、外的基準を設定しなければならない。ここでは、すべての被験者をケースとしたクラスター分析の結果を二つに分けて、2分類として使用した。また、要因アイテムには、アンケート調査時に合わせて行なった質問の項目を用いた。よって、カテゴリーはその選択肢である。